

令和 2 年度病害虫発生予報第 6 号

令和 2 年 8 月 5 日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	平年並～ やや遅い	平年並
		紋枯病	—	平年並
		セジロウンカ	—	多い
		トビイロウンカ	—	多い
		斑点米カメムシ類	—	多い
		コブノメイガ	—	多い
		フタオビコヤガ	—	少ない
	ダイズ	紫斑病	やや遅い	平年並
		ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い
		カメムシ類	やや遅い	やや多い
果樹	ナシ	黒斑病	—	やや多い
		ハダニ類	—	平年並
		シンクイムシ類	平年並	平年並
	カキ	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	やや多い
共通	カキノヘタムシガ	平年並	平年並	
野菜	ネギ	カメムシ類	—	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		白絹病	平年並	平年並
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
	ナガイモ	炭疽病	やや早い	やや多い
		ナガイモコガ	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
キャベツ・ ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（8月1日～8月31日：7月30日 広島地方気象台発表）

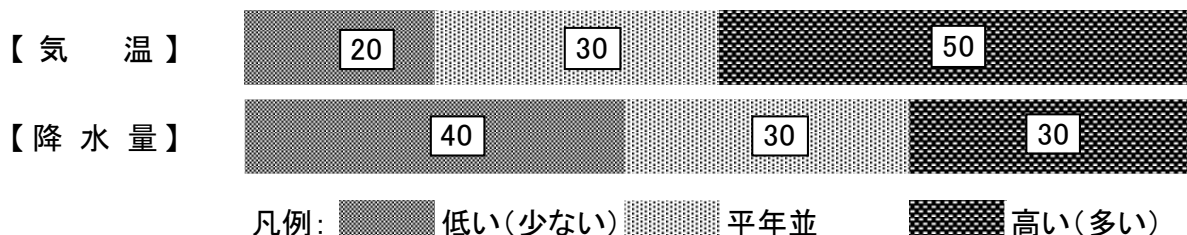
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

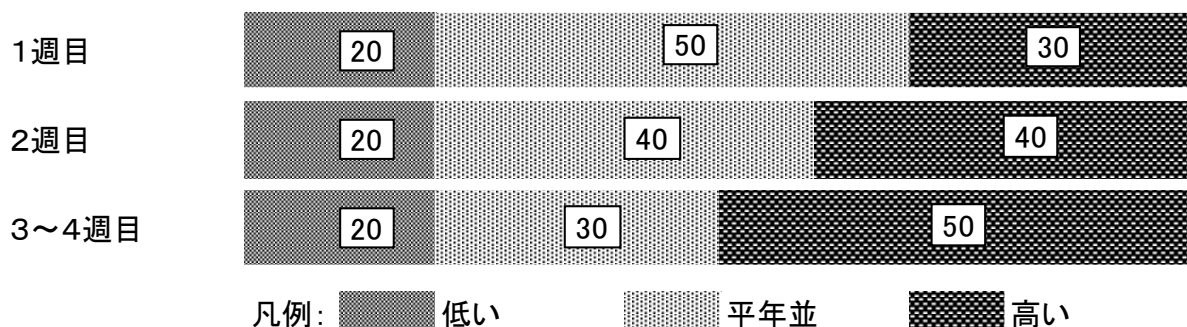
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並～やや遅い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の葉いもち発生ほ場率は、10.7%（平年：17.6%）と平年並である。

イ 7月下旬現在、水稻の出穂期は、早生品種については平年並、中生品種についてはやや遅いと見込まれることから、本病の発生時期は平年並～やや遅いことが予想される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地等の葉いもちの発生が多い地域では、穂いもちの発生が懸念されるため、防除を徹底する。

イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に散布する。な

お、降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。

ウ まだ出穂していない中生品種などにおいて、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布する（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。

オ 平成26年にストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、平成30年より本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場およびその周辺ほ場における使用を控える。

カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除を行う。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月3日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は、やや多い。

イ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。

ウ 幼穂形成期における茎数は平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病虫害防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年よりやや多い。

イ 7月31日現在、現地ほ場における発生は平年より多い。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

要防除水準（成幼虫数10頭/株）を超えているほ場では、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などで直ちに防除を行う。

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	多い

(2) 予報の根拠

ア 予察灯への初飛来は平年より早かった（本年：6月25日、平年：9月5日）。

また、7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年より多い。

イ 8月3日現在、現地ほ場の一部で発生が確認されている。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、大部分のほ場で本種を対象とした防除は必要ないが、本種の発生はほ場間差が大きいため、要防除水準（8月上～中旬頃の要防除水準：成幼虫数1頭/株）を超えた場合は、病害虫防除指針などを参考にして粉剤、粒剤などで防除を行う。

イ 8月下旬以降、発生量が急増すると予想される。各ほ場の発生状況に注意するとともに、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

5 斑点米カメムシ類（令和2年8月4日付けで病害虫発生予察注意報第2号を発表）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 多 い

(2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、水田周辺のイネ科植物では本種が発生しており、このうちアカスジカスミカメ及びクモヘリカメムシの発生量が平年より多い。

イ 8月3日現在、早植え、極早生品種等、すでに穂揃い期を迎えた水田における本種の発生ほ場率は平年並であるが、要防除水準を超えているほ場率は平年より高い。また、発生量も平年より多い。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和2年度病害虫発生予察注意報第2号を参照のこと。

6 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 多 い

(2) 予報の根拠

ア 8月3日現在、現地ほ場における発生時期は平年より早く、発生量は平年より多い。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年より多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ほ場間差が大きいため、発生が多いほ場では、幼虫発生初期（8月第2～3半旬頃）に病害虫防除指針などを参考にして粉剤、水和剤などを散布する。

7 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 少 ない

(2) 予報の根拠

ア 8月3日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早生品種栽培ほ場で発生が多い場合は、穂ばらみ期～穂揃い期に防除を行う。

なお、この時期は他の病害虫の防除時期と重なるので、本種にも登録のある殺虫殺菌剤などによって同時防除を行う。

イ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況に注意し、要防除水準（暫定版：次の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生が1.2 cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや遅い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期はやや遅いと見込まれることから、本病の発生時期はやや遅いと予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、降水量は平年並と予想されていることから、本病の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや早い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6～7月下旬までのフェロモントラップによる総誘殺数は、平年より多い。

イ これまでの発生経過及び気象経過から、若齢幼虫による被害は平年よりやや早い8月上旬以降に発生し始めると予想される。

ウ これまでの発生状況、現在のダイズの生育状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。

イ 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤又は水和剤などのスポット散布が有効である。

ウ 老齢幼虫に対する薬剤の効果は不十分であるため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数はやや多い。

イ 大豆の開花期は平年よりやや遅いと予想されることから、本種の発生時期は平年よりやや遅いと予想される。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月15～17日に行った県内巡回調査の結果、新梢葉の平均発病葉率は6.1%（平年：4.6%）と平年並であり、平均発病果率は5.0%（平年：2.7%）と平年に比べてやや高かった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 発病した果実は、園外で土中に埋めるなどして速やかに処分する。

ウ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液など、8月中旬にアミスター10フロアブル1, 500倍液又はストロビードライフフロアブル3, 000倍液などを散布する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月20、22日に行った県内巡回調査の結果、ハダニ類の発生量は平年に比べてやや少なかった。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0頭（平年：0頭）と平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生にやや好適な条件であり、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

ウ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

エ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル2, 000倍液、スターマイトフロアブル

2, 000 倍液、マイトコーネフロアブル 1, 500 倍液などを使用する。

3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数はほぼ平年並であるが、一部誘殺数の多いほ場が認められる。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第4回成虫は、平年並の8月中旬頃、モモシンクイガの第2回成虫は、平年並の8月上旬頃に増加すると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 発生が多い園ではシベルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤 2, 000 倍液又はイカズチWDG 1, 500 倍液）、テルスターフロアブル 3, 000 倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カ キ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と予想される。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスコア顆粒水和剤 3, 000 倍液など、8月下旬にストロビードライフロアブル 3, 000 倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量は平年並と予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にスコア顆粒水和剤 3, 000 倍液など、8月下旬にストロビードライフロアブル 3, 000 倍液などを散布する。

イ 緑枝の硬化が進んでおり、枝への感染は春に比べて起こりにくくなっている。今後は、二次伸びの緑枝部位と果実への感染が中心となるため、ほ場の観察をしっかりと行う。

ウ 発病が認められた新梢や果実は必ず切除して、園外に持ち出す。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月第6半旬現在、県予察ほ場（河原試験地）において、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 近年、被害が少なく、平年並の発生量と予想される。

ウ これまでの気象経過および向こう1か月の気象予報から、第2回成虫の発生盛期は平年並の8月上旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスミチオン水和剤40の1，200倍液などを散布する。多発園では8月中旬頃にアグロスリン水和剤2，000倍液などを追加散布する。なお、スミチオン水和剤40は収穫30日前までに散布する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類（令和2年6月25日付けで病害虫発生予察注意報第1号を発表）

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、予察灯及びフェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年並～やや多くなっている。

イ 7月下旬に行った現地巡回調査の結果、カメムシ類の果実被害は認められなかった。

ウ 県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、例年より早い7月第2半旬にカメムシ類の果実被害を確認した。

エ 8月以降、第2世代成虫の発生時期となるため、果樹園への飛来量が増加すると見込まれる。

オ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動にやや好適な条件であり、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和2年度病害虫発生予察注意報第1号を参照のこと。

野 菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷がつくような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ ナレート水和剤1, 000倍液、スターナ水和剤2, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、コサイドDF1, 000倍液、Zボルドー500倍液などを7~10日間隔で2~3回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2, 000倍液などを株元散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液、ポリベリン水和剤1, 500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1, 000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は別系統の発生を確認している（令和元年2月19日付けで、病害虫発生予察特殊報第2号を発表）。

イ 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。

ウ 散布剤はアグロスリン乳剤2, 000倍液、ディアナSC2, 500~5, 000

倍液、ファインセーブフロアブル2, 000倍液、グレーシア乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。

イ 散布剤ではハチハチ乳剤1,000倍液、ディアナSC2, 500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル1,000～2,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

ウ 同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場（米子市）におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ない。また、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における幼虫数は10株あたり0頭（平年：0頭/10株）であり、発生量は平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、プレオフロアブル1,000倍液、マッチ乳剤2,000倍液、ディアナSC2, 500～5,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生時期はやや早く、発

生量はやや多い。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ これまでの気象経過および向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 防除薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ない。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）における幼虫の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アタブロン乳剤2, 000倍液、フェニックス顆粒水和剤2, 000～4, 000倍液、プレバソフロアブル5の2, 000倍液などを7～10日間隔で散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生量が増加する。茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、カンザワハダニ対象に、コテツフロアブル2, 000倍液、ハダニ類対象にコロマイト乳剤1, 000倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場（米子市）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1, 000倍液などを使用する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場（大山町）におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ないが、前世代の誘殺数は平年に比べてやや多かった。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並だが、前世代の誘殺数は平年に比べて多かった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。また、幼虫の中齢期以降は薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除を徹底する。

イ キャベツの防除薬剤は、トルネードエースDF2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000～4, 000倍液、グレースシア乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第7号の発表は、8月26日(水)の予定です。